

きつねの嫁入り(当田町)

むかし、当田の南はずれに、窪田という所があり、そのあたりは一面すすぎが生い茂っていました。

ここは、夜になるときつね火がよく現われ、遠くはなれた民家からもよく見えたということです。五月上がり(田うえの終わったこと)の田んぼに水を入れるころのことでした。

夜なべに、おばばがあしたの子供のおやつにと、いろりにいろいなべをかけて豆をいっていました。

横座(いろりの奥の正面の主人のすわるところ)でおっちゃんは、きざみたばこをきせるにつめながら、

「なあんでむし暑い晩じやる。今夜あたりきつねの嫁入りがあるかも知らんで見てこいや。きつねが出ると、ちようちんの灯のように、ちらち





「見えるでな。」

「どんなやろう。」

娘のどしはちよつとこわい気もしたけれど、や
つぱりきつね火が見たくて、うす暗い玄関の方へ
走りました。かがみ腰で障子の引手の穴からそつ
と外をのぞきました。外はきり雨でかえるの鳴き
声が聞こえるだけで、何にも見えません。

「なあも見えんげの。」

「しばらく待っていよや。今に出るわいや。」

どしは、今か今かと胸をどきどきさせながら、

じいっと外を見ていました。

すると、遠くに一つ二つ灯がぼおうつと見え始
めました。あれがほうやろかと、目をこすりこす
りよく見ると、三つ四つとふえはじめ、ゆらゆら
ゆれながら後になつたり、先になつたりして、こ
ちらへ進んで来るようです。

「あつ見えた。」

「見えたか。ほんならまゆにつばをつけておけや、

きつねに氣付かれたら、だまされるでな。いつまでも見ているでねえぞ。」

と、おっちゃんに注意されました。

としては、あわてて指先で何回もまゆ毛につばをつけました。

「あつ、きつねの行列が見えた見えた。」
と、大きな声でさげびました。

行列の一番先頭の人は、ちようちんを手に、かみしもを着ていますが、よく見ると、太いしっぽが出ています。

つづいてかごに乗った花嫁さん、うつむきかげんで顔はよく見えませんが、綿帽子の下から細いあごが見えています。

行列は田んぼ道をこちらに向かって、だんだん近づいて来ます。そして、母屋のはさ場の所まで来ました。

「わあー嫁さん来た来た、ほらっ見て見てえ。」
と、としはふり返っておっちゃんを呼びました。



すると、

「いつまでも見ているなって言つたやろ。今にさ
そい込まれてしまふんやほれ。早よこつちへ
来い。」

と強^{つよ}くたしなめられました。としは、おっちゃん
のおきな声^{こゑ}で我^{われ}にかえり、あわてていろいろの所^{ところ}へ
もどりました

としは、本^{ほん}当^{たう}にふしぎ、ふしぎ、こんな面白^{おもしろ}い
こと始^{はじ}めて見^みた、もうしばらく見^みていたらどうな
つたかな? とぼんやり考^{かん}えていました。

おっちゃんも、おばばも、

「もう寝^ねよや。」

と言^いつただけで、きつねについては何^{なに}も聞^ききませ
んでした。

あんな面白^{おもしろ}いものどうしてかな?

夢^{ゆめ}のような出来事^{できごと}に、としはこつぶんしてなか
な寝^ねつかれませんでした。

昔の当田の地図

